

シュルレアリスム期のツァラにおける「転移」の問題

伊藤 琢 麻

はじめに

本稿では、1935年に出版されたトリスタン・ツァラの『種子と表皮』*Grains et issues*⁽¹⁾の中の精神分析用語「転移」が、どのような意図をもって使用されているかを考察し、彼の言語理論における隠喩との関係性を明らかにすることを試みる。その後、「転移」との関係性を踏まえた上で、ツァラの隠喩が有する特殊な言葉の操作法を指摘する。『種子と表皮』は詩的で抒情的な散文からなる前半部と、先行する散文の物語を契機に書かれた七つのノートからなる後半部で構成されている。はじめにこの著作が発表されるに至る経緯を整理しておこう。

1929年12月に『シュルレアリスム革命』の最終号が刊行されたとき、そこにはツァラの『近似的人間』の一部が掲載されており、これにてアンドレ・ブルトンとツァラの不和が——一時的にはあるが——解消されたことが示された。ブルトンの『シュルレアリスム第二宣言』が発表されたということも相まって、この年は、シュルレアリスムという現象の一つの転換点であると言えるかもしれない。ツァラにとっての20年代、それはいわば彼の沈黙の時代であり、長い歳月をかけて詩作に没頭した時代であった。対して30年代のツァラは、詩作を通じて思考した言語の営みについて、理論を構築していくことになる。一方でヘーゲルやマルクス＝エンゲルスの著作の、他方でフロイトやユングらの著作の科学的言説を経由しながら構築されることになるツァラの理論は、独特の難解さを有しており、理解するために一筋縄ではいかないのが実情である。理論的テキストとして重要なものは二つあり、一つは、1931年に『革命に奉仕するシュルレアリスム』誌に掲載される「詩の状況に関する試論」、そしてもう一つが、『種子と表皮』なのである。

はじめに挙げた「詩の状況に関する試論」の中で、ツァラは、ユングの『変容の象徴』にある「導かれた思考」と「導かれない思考」という二つの思考を図式的に使用している。前者は論理的で現実的な思考、後者は非論理的で夢想的な思考を指している。ツァラは、前者に基づく詩を「表現手段の詩」と名付け、後者に基づく詩を「精神活動としての詩」と名付けた。そして後者の詩の有効性を、この試論の中で述べている。そうは言うものの、それは後者の詩が前者の詩に対して絶対的に優位であることを示すわけではない。たしかにツァラは「導かれない思考」に重きを置きつつ、伝統や習慣から切断された思考の性格を抽出し、それを意義あるものとして認め

ていた。しかし、それと同時に彼は「導かれない思考」それ自体の有効性だけでなく、その思考と「導かれる思考」という二つの思考の相互循環を意識していたのである。「導かれた思考」が客観的な思考に、「導かれない思考」が主観的な思考に対応するとユングが定義していたことを踏まえると、この両者の循環は、主観性から客観性へ、客観性から主観性へ、という循環を示していると考えられる。このような、主客の循環に関する理論が「詩の状況に関する試論」から『種子と表皮』へと至るツァラの理論的テキストにおいて、主題の一つとして扱われているのではないかと推測される。

それでは、『種子と表皮』はこれまでどのようなテキストとして受け入れられてきたのだろうか。ツァラの死後（1963年以後）、『種子と表皮』が重要な書物であるということを指摘した研究者は少なくない。たとえば、ミシュリーヌ・ティゾン＝ブラウンは「ツァラの成熟を示す偉大な著作」として『種子と表皮』を位置づけている⁽²⁾、ツァラの全集編者であるアンリ・ベアールも『種子と表皮』が「シュルレアリスム運動へのツァラの大きな貢献」を示すものだと指摘している⁽³⁾。また、本稿でも後ほど参照することになるベアールの論文では、『種子と表皮』におけるフロイトとマルクスの用語について分析されている⁽⁴⁾。近年の研究に関して言えば、エミリー・フレモンが指摘した『種子と表皮』の「読み難さ」の問題が挙げられる。「言葉の質量、その強度や効果を説明しようとするこのイメージの横溢の中で驚くべき書物があらわれる⁽⁵⁾」と彼女が述べているように、『種子と表皮』の中の言葉は、ある言葉が柔軟に他の言葉と結びつくことで、作品が独自のイメージで満たされ「読み難さ」が生じる。そのイメージの充溢と「読み難さ」の生成の原因の一つとして、本稿で取り扱うツァラの隠喩の手法、すなわち言語活動のメカニズムが挙げられるのである。

このような先行研究に目を向けつつ、『種子と表皮』が何をもって偉大な書物として位置づけられるのかを改めて詳細にしていく作業が、これまで見過ごされてきたツァラ像を提出するための鍵となるのは間違いない。そうすることで、ツァラの言語理論をより良く知ることができると私たちは期待している。本稿は『種子と表皮』の分析のための初手として、シュルレアリスム期のツァラにおける精神分析の受容がどのようなものであったのかについて取り上げる。既に述べたとおり1930年代のツァラは、精神分析、マルクス主義、社会科学等、多岐にわたる文脈を有しており⁽⁶⁾、したがって彼の言語理論を紐解くためには上述のような複数の観点からの分析を行わねばならない。とりわけ精神分析の観点から言えば、『種子と表皮』の中では「転移」≪transfert≫という語彙が多数の箇所で使用されており、この現象をツァラがどのように解釈していたのかを知ることが必須となるのである。

「転移」解釈の共通点——フロイト、ユング、ランクを対象として

そもそもツァラが読んだと考えられる精神分析に関するテキストは何だったのだろうか。1935

年に『種子と表皮』が出版されるまでに、ツァラがフロイト、ユング、ランクらの著作を読んでいたことはわかっている⁽⁷⁾。『種子と表皮』の中で「転移」という語が頻出することを踏まえると、ツァラが「転移」に関心を持っていたこと、および「転移」について論じられた著作を参照していたのではないかと推察できる。したがって、本稿ではまず、1910年代から30年代にかけてのフロイト、ユング、ランクにおける「転移」解釈の共通点を見出したい。これによって「転移」が、ツァラの言語理論にどのような影響を及ぼし得たのかを考察する基盤を築くことができるだろう。

それではまず、フロイトの「転移」解釈について確認していこう。そのために、彼が1915年に発表した「転移性恋愛についての見解」という論文を参照していく。「転移性恋愛についての見解」で興味深い点は、精神分析の中にあられる恋愛は「転移」であり、つまり抵抗であるということ認めつつ、同時にその恋愛が本物であることを認めている点である。フロイトが述べるように、「転移性恋愛に抵抗が関与していることは疑いを容れない⁽⁸⁾」のだが、しかしその「愛は抵抗が作り出したものではない⁽⁹⁾」のである。また、「恋着が昔あった特徴の新版から成っており、幼児期になされた反応を反復していることはたしかである⁽¹⁰⁾」のだが、それは通常の恋着の本質でもあると述べられる。これらの同質性ゆえ、「転移」に由来する恋愛が通常の恋愛と変わらないものであるとフロイトはみなすことになり、それが「本物」の恋として成立しうると彼は結論付ける。

分析治療において現れてくる恋着に、「本物」の恋の性格を認めてはならないとする権利などどこにもないということである。分析ケアの外で見られる通常の恋着も、通常というよりむしろ通常でない心の現象を思い起こさせるものだが、そうした事情を考えれば、治療現場で現れるこの種の恋着がさほど通常とは見えないとしても、そのことはじゅうぶんに説明がつく。⁽¹¹⁾

「転移」現象から派生する恋愛の問題について、それが通常の恋愛とは異質なものとみなす必要はないと述べた箇所が続く形で、フロイトは、この転移性恋愛が特別であるということを示しつつも、「だからといって、基準からはずれたこれらの特徴こそが恋着一般の本質をなすものであることは、忘れてはならない⁽¹²⁾」と明言していることから、フロイトは転移性恋愛を通常の恋愛とみなしていたということがわかる。

もちろん、フロイトはこの「転移性恋愛」に分析家および患者が屈してならないと述べており、恋愛関係を称揚しているわけではない⁽¹³⁾。なぜなら、「恋愛関係は、分析的治療の影響を打ち砕いてしまう⁽¹⁴⁾」からである。当然のことかも知れないが、患者が回復するためには、分析家が患者に治療を施す必要がある。言い換えれば、分析家が患者に左右されること無く、影響を与え続ける必要があるのだ。さもなければ、力動精神医学のシステムに則った治療を継続することが

困難になってしまうのである。転移性恋愛という現象は、患者が分析家に影響を与えることを可能にする。それゆえこの現象は、患者と彼（彼女）を治療する分析家という力動精神医学のシステムを揺さぶり、恋愛のシステムへと前者を變形するおそれがあるのである。

続いて、ユングにおける「転移」解釈に移ろう。ユングは、1929年に「近代精神治療学の諸問題」という論文を発表しており⁽¹⁵⁾、その中で「転移」解釈が行われている。ユングの「転移」解釈は、医者（分析家）と患者の「相互作用」を推奨するものだ。ユングによると、「転移」によって、医者（分析家）と患者という「二つの人格」が出会い、「相互作用」が引き起こされる。それは「いわば、性質を異にした二つの化学物質の混和のようなものである。両者のあいだにそもそも化合というようなものが成立しうるとすれば、そのばあいには、両者ともに変化を遂げている⁽¹⁶⁾〔強調原文〕」。ユングはこのように述べ、医者（分析家）はこの事実から目を背けてはならないと主張している。

影響をおよぼすということは、触発されたということとおなじ意味である。医者が、患者から影響されているという事実を目をつぶり、みずからを医者としての父親的な権威の後光につつまうとしても、それはまったく無駄である。そんなことをすれば、その医者は、もっとも重要な認識方法をわが手でふさぐだけの結果に終わる。⁽¹⁷⁾

フロイトは、転移を原因として恋愛があらわれることを指摘したが、この恋愛は治療の妨げになると述べた。ユングの場合は、反対に、積極的に患者からの影響を認めることを主張し、医者（分析家）の「父親的な権威」を批判する。「治療にあたっては医者も患者もひとしく《分析をうけつつある》のだ⁽¹⁸⁾」と言うユングは、相互に影響を与え合いつつも治療が継続できるのだと述べているのである。その是非に関しては判断を差し控えるが、いずれにせよ、ユングにおいても「転移」とは患者から分析家へ影響を与える現象であったのである。「相互影響」を認めるユングの手法は、力動精神医学のシステムとは別様の治療システムであったと言えよう。

最後にオットー・ランクの『出生外傷』に目を向けよう。ランク自身がフロイトの寵愛を受けた弟子であったことからわかるのだが、この著作は、フロイトのアイディアを継承している。フロイトは『夢解釈』で「誕生という行為は、初めての不安体験であり、それゆえ不安感情の元型である」と述べているが、ランクもまた、誕生という行為が母胎からの切断により生じることから、そこに不安の元型を見出している。しかし、ランクの試みは「神経症病理、トーテミズム論、性発達理論、治療論、エディプス・コンプレックス論を、出生外傷の影響を踏まえて考察し直す必要性を訴えた⁽¹⁹⁾」もので、フロイトの理論の先を行くものであった。「ランクの言う「外傷」とは、病理の要因となるものや偶発的なものというよりは、むしろ発達の過程で避けることのできない、必然的な人間的経験のことを指して⁽²⁰⁾」おり、この出生外傷を想起することが可

能になるのが精神分析の自由連想と「転移」によるものであるとランクは考えた。

このような全てのことは、フロイトによって作り上げられた、連想と転移の技術のおかげでもたらされる。しかしながら、その技術を利用して、私たち〔分析家たち〕は自身の無意識を患者の無意識に対峙させるのであり、これが患者のリビドーに影響をあたえるための唯一の手段なのである。⁽²¹⁾

分析家と患者の無意識が対峙させられることによって、避けがたく生じてしまった必然的「外傷」に影響を与えることができるようになる。そして、そのような場ないし関係性において「外傷」の治癒のために重要なのが、患者の情緒的体験になるのである。したがって、患者に対して治癒を施すことが可能であるという権力を有した分析家としての役割はランクの発想にはなく、患者が自ら「転移」や抵抗を体験可能な関係性を構築することが、彼にとって肝要であったと言えるだろう。大塚紳一郎はランクの功績を次のように評価している。「転移や抵抗をほんとうに情緒的に体験することが、患者自身がその意味を理解するうえで、ひいては精神分析の臨床のうえで、決定的に重要なのだということが、ここではじめて明確にされたのである⁽²²⁾〔強調原文〕」。

さて、これら三者の「転移」解釈をめぐる共通点をまとめておこう。まず、「転移」は分析家と患者の関係性をめぐってあらわれる現象であるということだ。次いで、この現象によって、患者が分析家に影響を与えることが可能になるということである。言い換えると、ある関係性において、一方から他方へと何かを移動する力を「転移」は新たに生み出すということである。最後に、「転移」によって新たに生み出される移動の力は、元々のシステムを他のシステムへと変形させる可能性を孕んでいるということである。たとえばフロイトにとって、患者が分析家に影響を与える転移性恋愛は、力動精神医学的なシステムを揺るがし治療を妨げる危険があった。ユングの「相互影響」の主張や、ランクの「情緒的体験」の実施は、医学というシステムの外側に出るものではないにしろ、従来のものとは異なる新たな治療システムとなった。つまり、力動精神医学的なシステムによって捉えられるはずだった患者と分析家の関係性は、「転移」を経由することで、他のシステムに基づく関係性によっても解釈可能になるのである。したがって「転移」とは、元々のシステムと手を切ることを前提とし、その中断からはじまることで何かを語らせ得る現象なのである。

転移と隠喩、あるいは二つの項が強引に似通うこと

ここまでフロイト、ユング、ランクにおける「転移」解釈に目を向けてきたことで、「転移」が一方から他方へと何かを移動する力を新たに生み出し、何らかのシステムの操作が可能になることが理解できた。ここからは、この「転移」を、ツァラが『種子と表皮』の中で多用した原因

とその結果を探っていく。

まず、ツァラが「転移」という言葉を使う時、それが、精神分析的な意味での「転移」として使用されていることを確認したい。『種子と表皮』の第三のノートの冒頭で、ツァラは次のように記している。

精神分析にとって転移という行為は、分析を受けるものの心的諸機能が、「治癒」と俗に呼ばれる平衡状態へと回帰することを示している。しかしもし、病人の場合には極限にまで押し進められる転移が解釈され研究されるならば（転移の強度の具合はそれを容赦なく目立たせるからだ）、この現象はあらゆる個人や限定的なものの中に潜在的な形で存在するし、最もありふれた形で、つまり基本的には思考のメカニズムからなる比較の過程において存在することがわかる。⁽²³⁾

「精神分析にとって」の「転移」をツァラなりに説明していることから、彼が使用しているこの語をフロイトやユングらの解釈と結びつけて語ることは的外れではないはずである。ただし、ツァラによると「転移」は「病人」だけに見られるのではなく、「あらゆる個人や限定的なものの中に潜在的な形で存在する」のであった。したがって「治癒」が求められるのは、精神分析的な意味での「患者」に限るのではなく、万人であったと考えられるだろう。この引用文の直後、「転移」は隠喩の機能回復のために貢献するとツァラは述べる。

転移という行為は、精神の次元では、隠喩の方程式の機能回復を示している、つまり、主体に結び付けられた能力を外部に投射する力、ないし、ある客体に属する能力を他の客体に投射する力のことだ。これらの能力は、等価性の原則に則り、目的を変えながら転じていく。⁽²⁴⁾

「転移」が回復させる隠喩の機能とは「主体に結び付けられた能力を外部に投射する力、ないし、ある客体に属する能力を他の客体に投射する力」である。これは、フロイトにおいて患者の幼年期の記憶が分析家という外部へと投射され恋愛という出来事が生まれるように、あるいはユングにおいて患者と医者（分析家）が内外問わず影響を与え合うことによって「相互作用」が生まれるように、主体とその外部が一方から他方へと何かを移動させることを可能にする関係性を取り結ぶ「転移」の特性と同様のものとみなせる。ツァラが言うように「転移のように、共にあらわれ、敵対し、対立する、そして他方の特性を一方に反映することによって結合される二つの項を隠喩は要求する⁽²⁵⁾」のである。

このようにして、「転移」と隠喩の共通点が徐々に見えてきた。両者に共通するのは、主体から客体への移行のように、ある項から他の項への移行を推進する力である。ここで一度、従来の

隠喩の性質を振り返っておきたい。それというのも、従来の隠喩解釈とツァラのそれを比較することによって、彼の隠喩が持つ特殊性が浮き彫りにされると期待できるからである。

隠喩というレトリックは、言葉のある項と他の項が類似関係にあるということを条件とする。古くはアリストテレスが『詩学』および『弁論術』で隠喩と類似の関わりを述べているし、私たちの時代により近いところではポール・リクールが、まさにアリストテレスを引きつつ『生きた隠喩』の中でその特性について説明をしている。また、ロマン・ヤコブソンは「言語の二つの面と失語症の二つのタイプ」(1956年)の中で、隠喩と換喩の両極に関して分析しており、彼はそこで両者を次のように説明している。「一つの話題から他の話題へと相似性によってか、隣接性によってか、いずれかによって進行する。隠喩的方法が第一の場合に、換喩的方法が第二の場合に、最も適当な呼び名であろう⁽²⁶⁾」。このように、ヤコブソンは「一つの話題から他の話題へ」と移行する際の性質の差異をもって隠喩と換喩を分類している。既に確認したように、これは「転移」の性質と重なる部分があるだろう。ただし隠喩が作動するためには、彼によると、「相似性」という条件が必要になる。つまりあるものと他のものがそっくり類似していることが条件となるのである。

それでは『種子と表皮』における隠喩も、類似という条件のもとに二項の移行を実現するのだろうか。ツァラは「擬態(ミメーティスム)」という言葉を用いつつ、隠喩によってもたらされる、主体がその外的な場に位置する客体と同一化するメカニズムについて次のように言及している。

そして詩人の行動は外的な客体との同一化や、ある客体の能力が他のものの能力の中に吸収されることによって、擬態(ミメーティスム)の現象へと連れ戻されることになるだろう。それは、転移行為に関わりを持つ現象であり、さまざまな感覚の機能をたったひとつの感覚に集中させることによって、生物学や動物の世界の中に対応する作動を発見するのである。⁽²⁷⁾[強調原文]

「外的な客体との同一化や、ある客体の能力が他のものの能力の中に吸収されること」、すなわち隠喩の機能によって、詩人の行動は「擬態(ミメーティスム)」へと至ることになる。果たして、この「擬態(ミメーティスム)」は、従来の隠喩を引き起こす条件となる類似と近いものなのだろうか。重要なのは、ツァラの隠喩が「転移」とかかわりを持つということである。私たちが既に確認した「転移」の特性——ある項から他の項への移行を推進する力、たとえば、分析家と患者という力動精神医学的システムに基づく関係性が、新たなシステムに基づく関係性へと移行すること——は、あるものAと他のものBが類似しているかどうかを根拠とするものではなかった。したがって、「擬態(ミメーティスム)」が、従来の隠喩の条件である類似と完全に一致する概念であると思なすことは困難であるだろう。

それでは、私たちはこの概念をどのように解釈できるのだろうか。ツァラの隠喩においては、精神分析的な意味での「治癒」が日常的なもののみならず、個人と社会の関係性を捉えるための詩が形成されていく。ベアールが次のように述べているように、ツァラは「モダンな詩で構成された隠喩的システムの中において、弱められた形で、精神分析的行為における治癒の過程の特性が日常的に存在するというを考えており、また、その理由で詩的行為が個人を生成途中の社会に統合させる過程となることを考えているのである⁽²⁸⁾」。彼によると、この「主体が集団に統合されるプロセスにおいて隠喩が可能な役割⁽²⁹⁾」があるという。しかしながら、一つの「主体」と「集団」が類似関係にあるとは到底思えないのではなかろうか。私たちの一般的な感覚をもってしても、「集団」とは複数の「主体」ないし諸「個人」の集合であり、数的な差異をはじめ、そっくり似た者同士であると考えるのは苦しい。それにもかかわらず「主体と集団の関係性」を隠喩＝類似関係であるものとして捉えようとするのであるなら、一方の項が、他方の項と類似していると思ひ込むしかない。「擬態（ミメーティスム）」とは、その名の通り、ある項が他の項を隠蔽的に模倣することなのだ。

ヤコブソンを例に、隠喩が「一つの話題から他の話題へ」と移行する性質を備えていることを私たちは既に確認した。そして、その際に移行の対象となる二項は、類似という条件を必要とすることも確認した。ツァラの隠喩もまた、二項間の移行を実現するという点は同様である。しかし、ツァラの隠喩は、両者が類似していることを要求はしない。ベアールが「隠喩の非常識な使用によって、精神分析的な転移のプロセスをシステム化することで、詩は革命的行為に介入可能である」⁽³⁰⁾と述べたように、ツァラの「隠喩の非常識な使用」は、両者を強引に似通ったものとしてみなしてしまうのである。

隠喩の終着——新しいシステム

以上のように、ツァラにおける「転移」とは隠喩と同様に語られ、その機制は、あるものと他のもの——主体と客体や、分析家と患者——を強引に結び付け操作することであることを導き出してきた。彼の言葉を借りて言えば、そのような関係性は「隠喩の終着」*« la conclusion métaphorique »*と形容できると私たちは考える。なぜなら、ここから展開される議論は、隠喩的關係を強引にも認めてしまうことで、それが最終的にどこに行き着くのかという点を中心に展開されるからだ。その機制を考えるために、ノートからの引用を確認してみよう。

あらゆる議論のまさに中心に、一連の理解できないことの原因に先行しつつ、それから、それらの原因を人間が自由に使用できる原則的な道具——それは表現の道具だ——の試験によって制御しつつ、心の態度としての言語活動の問題は位置づけられねばならないだろう。⁽³¹⁾

どう考えても類似関係を見出すことのできない「理解できないことの原因」に先行してしまうのが「表現の道具」である。ツァラによると、このような視点から「心の態度の言語活動の問題」は位置づけられねばならない。つまり、意味を産出するシステムの枠内に言語活動を位置づけるという論理ではなく、その反対に、言語活動によって、システムの方が変形させられ、新たな意味を産出させていくという論理になる。

エレナ・ガルツォヴァは、ブルトンの言語が「連辞的」*« syntagmatique »* であるのに対し、ツァラの言語が「範例的」*« paradigmatique »* であると述べた⁽³²⁾。「連辞」と「範例」はソシュールの用語である。「連辞」とは「主語＋動詞＋形容詞」のような結合規則のことで、「範例」とは一定の特徴を共通項に代替可能になる記号の関係性のことだ。エレナ・ガルツォヴァによると、たとえば、ツァラの有名な言葉である「思考は口の中で作られる」や「思考は手の中で作られる、言語活動は身体をなす思考にくっついている」は範例的である。なぜなら、上述の文章において「思考」は、「口」でも作られるし、「手」でも作られるということを示しているからだ。つまり、それは、いかなる身体的器官でも作られるのであり、それぞれの項は他の項と等価であるとみなされ代替可能になるのである。日常的な意味産出のシステムにおいて、「口」と「手」が似通っていると私たちは考えないだろう。しかしながら、二項を強引に似通わせるツァラの隠喩の使用により、ある言葉と他の言葉が等価とみなされうるようなシステムが新たに構築されるのである。

「隠喩の終着」によって構築されてしまう新しいシステムは、ツァラによるならば、ある二項から生れ、次いで他の二項から生れ、さらにまた他の二項から生れ、というように永続的に交換されていく。一度作り出されたシステムが不変であるとみなされることは毛頭なく、隠喩の作用は進展と増加によって繰り返され、元のシステムを変形させ続けるのである。

要約すれば、以下のように断言可能かもしれない、「思考に先天的なペテン師根性」は、進展と増加によって生を助ける、まさにこの隠喩的な永続交換という表現に存在するのだと、ある新しい内容は他のものを覆い隠しており、また新たな内容を生産するという目的のもと他のものの上に成り立つ、その意味に同化した後、各々は先立つものを否定する、不変のよう見え、堅固な輪郭における思考様式のあらゆる固定化は、神経症的なものの病的な状態を特徴づけるのだけれども、神経症的なものとは、イメージの形状が安定しているという信仰に結びついているのだが、それは危険な妄想の犠牲者なのだ。⁽³³⁾

システムの「不変」の犠牲者こそが、ツァラの解釈による「神経症」患者なのだ。彼らは、あらゆるものが固定的で不動のものであるとみなす信仰に苛まれているのである。「転移」や隠喩のように、一方から他のものへと何かを移動させてしまう現象をツァラは肯定し、かつこの「隠喩的な永続交換」によって、いつか彼らに合致するシステムが生れてくることを待ち望み、「神

経症」患者を「治癒」しようと試みたのである。

ところで、ここまでツァラが用いる独特な隠喩の手法を考察してきたが、この手法を下支えするのは「転移」の成功に対する不自然なまでの信頼であると考えられるのではないだろうか。深く立ち入ることはできないが、他のシュルレアリスト、たとえばブルトンにとっては「転移」の失敗があり得た。鈴木雅雄はブルトンとナジャの「転移」失敗について次のように述べている。「まず相手に自分の物語を読み込み、次にそこから目を覚ます「正常」な転移（＝治癒）のプロセスは、双方にとってありえなかった。転移は「テキスト」によって失敗するのである⁽³⁴⁾」。テキストが「自分の物語が相手に読み込まれていないこと」を客観的に示してくれるがため、ブルトンとナジャの間で「転移」は失敗する。それゆえ、「自らの真実が相手にとっての自分自身と一致することはありえないという事実⁽³⁵⁾」にブルトンは向き合うことができた。彼とは対照的に、ツァラが「転移」が失敗するということに無関心であったとみなすと、その真偽はともかくとして、彼にとってのありとあらゆる真実が相手にとってもありえることとなる。たとえそれが「秩序＝無秩序、私＝非-私、肯定＝否定⁽³⁶⁾」という馬鹿げた真実であっても、それが他者と共有できるのだとツァラは信じていたのだと、彼の隠喩の手法を考慮すると思えてくるのである。事実、シュルレアリスム時代に書かれたものの未刊であった『不眠症的人格』*Personnage d'insomnie*——『種子と表皮』と同時期に制作されたもう一つの哲学物語——では、今述べたような馬鹿げていて不可能な関係性から、新しいシステムが開花すると語られている。それは、不可能ながらも書かれてしまったテキストが予見する「論理的に不完全な統語法」の存在に関する指摘である。

「私が君といま名乗る」ように、「彼は桜の木だった」という文章が予見しているのは、あるシステムにおいて建立された論理的に不完全な統語法の開花とその可能な限りの逸楽だ。そのシステムの所与は有名な鳩舎よりも具体的であるのだが、しかし、余暇の時間と確定されたオブジェの逃走——つまり、それなしでは我々が神の思想を数学的無制限の思想と結びつけることができない空間に関するすべての糞便的概念——が隠喩についての、最も快適な散歩と最も優美な技巧の周波数を所持しているのである。⁽³⁷⁾〔強調原文〕

「私」は「君」ではないにもかかわらず、そのように名乗ることのありえなさ。同様に「彼」は「桜の木」であったということのありえなさ。ツァラの「転移」に対しての信頼＝強引な隠喩は、「不完全な統語法の開花」へと至るのである。そしてこのようなプロセスを経て生まれる新しいシステムこそ「隠喩の終着」なのだ。既存の統語法＝言語のシステムによって、ある言葉と他の言葉が隠喩的關係を取り結んでいることを知るのとは反対に、ある言葉と他の言葉が隠喩的關係にあることを疑わないことによって、言語のシステムの方を改変しようとする目論見が、このようにして浮き上がってくるのである。

「隠喩の終着」へと宿命づけられている二つの項は、「転移」を信じて疑わないことによって等価となり、一方から他方へと交換されていく。そして、そのような作業は新しい言語のシステムを作り出していく。こうして誕生する新しいシステムが、ツァラによれば、人間の認識をも作り変えていくのである。

人間の生産行為が交換によって支配されているように、精神の生産行為は新しい隠喩の創造を含んでいる。新しい隠喩の創造とはテクニクではなく、認識のゆっくりとした道のりが要求する新しい内容に対して思考形式が永続的に適合するということなのだ。⁽³⁸⁾

私たちの確認してきた、ツァラが確立しようとした「新しい隠喩」とは「テクニク」ではない。つまり、テキストを装飾するための技法ではないのだ。そうではなく、「新しい隠喩」とは、「認識のゆっくりとした道のりが要求する新しい内容」（言葉が紡ぎ出すもの）の方に、「思考形式」（言葉が紡ぎ出すものを理解するためのシステム）を適合させるためのものなのである。言い換えれば、強引な操作をもって「新しい隠喩」が創造されることによって、既存のシステムを揺さぶることが可能になるのである。

二項を強引に似通わせる「新しい隠喩」によって新たなシステムが構築されるということ、すなわち「隠喩の終着」を採用することで、ツァラは言語の可能性を拡張しようとした。その可能性は、通常統語法をもって見出すことの難しいものなのである。だからこそツァラは、通常の統語法では理解しがたい——一種の不可能な——領域を主張することのできる新しいシステムを作り出そうとした。それは、あるシステムを、他のシステムへと移行させる挑戦により、理論が持つ枠組みを変形させる手法なのである⁽³⁹⁾。

おわりに

私たちは、『種子と表皮』に影響を与えたと考えられるフロイト、ユング、ランクの「転移」解釈を整理し、その「転移」に端を発する隠喩の手法を見出そうとした。また、対象の二項を強引に操作する「隠喩の終着」によって既存システムに揺さぶりをかけるツァラの言語理論の一片を描き出そうとした。

「解剖台の上での、ミシンと雨傘との偶発的な出会い」のような語と語の新しい接近によって結びばれてしまった不可能な関係性を解釈するためには、それを認可するようなシステムを生み出さざるをえない。「転移」が医学から恋愛という新しいシステムを生み出しうるように、隠喩もまた新しいシステムを作り出しうる。この新しいシステムの規則によって、私たちが従来「ありえないもの」とみなしてしまう関係性は、ありえるものとして強引にも成立していく、ということを私たちは確認してきたはずだ。

本稿で理解しようと試みたツァラにおける「転移」の問題は、1930年代のシュルレアリスムグループの中で、弁証法の問題と同時に展開されている。『種子と表皮』の中には、「質量転換」や「相互浸透」をはじめとする、ヘーゲルの論理学や、マルクス＝エンゲルスの哲学を明らかに意識している言葉遣いが目立っている。『フレンチ・ヘーゲル』の中で、ブルース・ポーは、ブルトンの弁証法がヘーゲルに由来する「真なる弁証法ではない」ことについて述べたが⁽⁴⁰⁾、ツァラもまた、彼なりの「弁証法」を有していたはずだ。それゆえに、「転移」という精神分析のタームに依拠したツァラの隠喩の詩学が、ヘーゲルやマルクス＝エンゲルスの言説とどのように交わっていくのかを分析しなければならないだろう。本稿で取り扱った精神分析の観点を保持しつつ、他の科学的見地から『種子と表皮』の分析を継続することで、ツァラの言語理論をより一層明瞭に示すことが可能になると期待している。それは、ツァラを媒介に、二十世紀における文学と科学の接近を語るために必要な作業となるはずである。

注

- (1) *Grains et issues* からの引用は原則としてフラマリオン社より出版された次の文庫版から行った。この文庫版にはアンリ・ベアールによる詳細な注釈が施されている。Tristan Tzara, *Grains et Issues*, [1935], Paris, Flammarion, 1981. (以下 GI と略記。)
- Grains et issues* の邦題に関しては、訳書として刊行されており現在も読むことが可能ということから塚原史の『種子と表皮』を採用した。塚原は本書の表題について「ライプニッツの言葉に由来する表現 la paille des mots et le grains des choses (言葉の殻＝外皮と事物の種子＝実体)に見られる、現象と本質、形式と内容、表層と深層等々の対応関係が、そこに含まれているばかりでなく、人間のさまざまな活動の中身とそれらの残滓のイメージ化が、この表題において企てられている〔強調原文〕」と言及している。(トリスタン・ツァラ『種子と表皮』塚原史訳、思潮社、1988年、192頁。)
- なお、原文からの翻訳については拙訳を試みた。邦訳が既にあるものは、当該の文献を適宜参照した。
- (2) Micheline Tison-Braun, *Tristan Tzara, inventeur de l'homme nouveau*, Paris, Nizet, 1977, p. 39.
- (3) Tristan Tzara, *Œuvres Complètes*, tome.3, Paris, Flammarion, 1979, p. 513. (以下、全集からの引用は O.C. と巻数を示し略記。)
- (4) Voir. Henri Béhar, « Le vocabulaire Freudiste et Marxien de Tzara dans *Grains et issues* », dans *Mélusine*, N° 5, Paris, L'Age d'Homme, 1984.
- (5) Émilie Frémond, « Lecture de *Grains et issues* », *Mélusine* (site web), 2015, <https://melusine-surrealisme.fr/wp/?p=1953>. 最終閲覧日：2017年8月23日。
- (6) ツァラがフロイトやユングを読み、またマルクス＝エンゲルスを読んでいたことは既に述べたが、30年代初頭から、彼はロジェ・カイヨワやジュール・モスロといった社会学者とも交流している。36年には、彼らにアラゴンやユニクを加えた仲間たちと、『アンキジション』という雑誌を発行し(ただし一号で終了)、ツァラは「社会の中の詩人」というテキストを寄稿した。ツァラの交友関係に関しては次の伝記が詳しい。François Buot, *Tristan Tzara*, Grasset, Paris, 2002. (=『トリスタン・ツァラ伝 ダダの革命を發明した男』塚原史、後藤美和子、思潮社、2013年。)
- (7) Voir. GI, p. 33.
- (8) フロイト「転移性恋愛についての見解」道旗泰三訳、『フロイト全集13』所収、岩波書店、2010年、321頁。
- (9) 同書、321頁。

シュルレアリスム期のツァラにおける「転移」の問題

- (10) 同書、321頁。
- (11) 同書、321-322頁。
- (12) 同書、322頁。
- (13) 「分析家は、愛をいかに高く評価していようと、それ以上に、患者を人生において決定的に一段高め上げるための機会のほうを重視しなければならない。患者のほうは、分析家から、快原理を克服することを学ばなければならない」。(同書、324頁。)
- (14) Sigmund Freud, « Observations sur l'amour de transfert », *La technique psychanalytique*, [1953], Paris, PUF, 2002 (14e édition), p. 124.
- (15) ユングのこの論文をツァラが読んでいたかどうかは明言できぬところであるが、発表年を踏まえると、彼が読んでいた可能性はあると言えよう。
- (16) C.G.ユング「近代精神治療学の諸問題」高橋義孝訳、『ユング著作集2 現代人のたましい』所収、日本教文社、1974年、40-41頁。なお引用に際して旧字を一部改めた。以後の『ユング著作集2』からの引用も同様。
- (17) 同書、41頁。
- (18) 同書、42頁。
- (19) オットー・ランク『出生外傷』細澤仁、安立奈歩、大塚紳一郎共訳、みすず書房、2013年、209頁。
- (20) 同書、221頁。
- (21) Otto Rank, *Le traumatisme de la naissance*, [1924], traduit par S. Jankélévitch, Paris, petite bibliothèque payot, 1976, pp. 217.
- (22) オットー・ランク『出生外傷』、前掲書、206頁。
- (23) GI, p. 183.
- (24) *Ibid.*, p. 183.
- (25) *Ibid.*, p. 183.
- (26) ローマン・ヤコブソン「言語の二つの面と失語症の二つのタイプ」川本茂雄他訳、『一般言語学』所収、みすず書房、1993年（1973年初版）、39頁。
- (27) O.C. t.3, *op.cit.*, p. 130.
- (28) Henri Béhar, « Le vocabulaire Freudiste et Marxien de Tzara dans *Grains et issues* », *op.cit.*, p. 104.
- (29) *Ibid.*, p. 102.
- (30) *Ibid.*, p. 112.
- (31) GI, p. 188.
- (32) Eléna Galtsova, « « Le Désespéranto » : Utopie de l'écriture universelle chez Tzara et Breton », dans *Mélusine*, N° 8, Paris, L'Age d'Homme, 1986, p. 275-276.
- (33) GI, p. 184.
- (34) 鈴木雅雄『シュルレアリスム、あるいは痙攣する複数性』、平凡社、2007年、155頁。
- (35) 同書、156頁。
- (36) O.C. t.1, Paris, Flammarion, 1975, p. 362.
- (37) O.C. t.3, p. 175.
- (38) GI, p. 184.
- (39) ダダの時代、ツァラが「システムの不在もまた一つのシステムである」と述べていたことを思い出したい。これは、「不在」の主張もまたシステムに取り込まれてしまうという逃走の不可能性を述べているのではなく、「システムの不在」という「システムが在ることとは真逆の新しいシステム」が存在するということを述べているのだと解釈できるのではないだろうか。
- (40) Bruce Baugh, *French Hegel: From Surrealism to Postmodernism*, Oxford, Routledge, 2003, p. 56.